

読む

# 自分に引き寄せる楽しさを

筑波大学附属小学校 教諭 桂 かつら 聖 さとし

文学的文章

## 「自分だったら」と考えてみる

一年上巻に、「ゆうやけ」という作品が登場しました。新しいズボンがうれしくてどきどきしていたのに、遊んでいるうちに夢中になって忘れてしまう主人公の姿は、低学年の子どもたちの経験と重なるものです。「自分と似ているところはないかな」と投げかけると、次々に発言が生まれるはずですよ。

また、「ミリーのすてきなぼうし」（二年上）も、同じように「自分だったら、どんな帽子が欲しいだろう」と想像しながら楽しく読むことができます。「こんなときは？」「こんな場所だったら？」と、先生が投げかけることで、いっそう豊かな想像が膨らむでしょう。

## 成長の過程に寄り添って

新しく中学年に入った「もうすぐ雨に」（三年上）、「プラタナスの木」（四年下）は、どちらも人物の気持ちの変化を読み取るのにふさわしい作品です。「もうすぐ雨に」が「かえる」に対する気持ちの変化であるのに対して、「プラタナスの木」は、「木」という、風景に近いものに対して抱く人物の気持ちの変化を読み取るようになります。二年間を通して、子どもたちの読みがどう変化するか、学習の積み上げを確かめてみたいものです。

友達との関係が描かれた「なまえつけてよ」（五年）は、クラス替えが多くある五年生の始まりに適した内容です。子どもたちの成長の過程を見ると、「近寄りたいのに、いたずらする」といったように、それまで一体化していた「行動と心情」が逆になるのも、この時期の特徴です。登場人物

「勇太」の行動を、「自分自身と比べてみよう」と投げかけてみてはどうでしょう。

六年の卒業期に配された「かなえられた願い——日本人になること」は、社会や世界に向けて意識が高まるこの時期に、ぜひ出会わせたい文章です。「話す・聞く」教材「今、私は、ぼくは」と関連づけて扱うことも考えられます。

説明的文章

## 少しずつ高みを目ざす

一年上巻に新しく入った「うみの かくれんぼ」は、文章全体に関わる「初め」の部分があり、そのうえで、複数の事例それぞれに対して「何が、どのように」と説明されています。それまでに学習した「くちばし」と読み比べて、その違いに気づかせることもできます。

学習のつながりという点では、三年一学期教材「こまを楽しむ」にも注目したいと思います。内容だけでなく、論理のおもしろさに気づかせたい中学年では、年間を通して、だんだんにレベルを高めていく配列がなされています。指導計画を立てる際、この後に続く「すがたをかえる大豆」「ありの行列」（三年下）を並べて読んでみる

ことをおすすめします。

また、読書に位置づけられている「里山は、未来の風景」（三年上）は、子どもたちにとって興味深い内容です。これまで教科書になかった文種に出会うことで、読書の幅が広がるでしょう。

## 自らの生活に目を向けて

高学年には、論理の進め方のおもしろさと、子どもに考えさせたい内容とを兼ね備えた文章が登場しました。「想像力のスイッチを入れよう」（五年）は、筆者の意図を捉えながら、「自分なら、この文章にどんな題名を付けるか」という話し合い活動に広げても、活発なやり取りが期待できます。

「時計の時間と心の時間」（六年）は、書かれている内容を自分の生活と結び付けながら考えさせたい文章です。六年生のこの時期の子どもたちは、データを集めて、それを根拠にスピーチするなどの活動も進んで行います。そうした活動と関連づけることも有効でしょう。そんな学習を通して、実験結果やデータを活用した筆者の論の展開の工夫に気づかせたいと思います。（談）



▲「なまえつけてよ」（5年P20-21）



▲「こまを楽しむ」（3年上P42-43）



かつら・さとし

山口県生まれ。著書に『国語授業のユニバーサルデザイン』（東洋館出版社）、「フリースクで読みを深める文学の授業」（学事出版）などがある。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。